□鼎談／〝住吉時代〟の谷崎潤一郎を語る

東灘住吉は『細雪』の故郷（ふるさと）

谷崎　松子〈故谷崎潤一郎夫人〉
嶋川　信子〈松子夫人の末妹〉
市居　嘉雄〈谷崎潤一郎の歌碑を建てる会事務局〉

谷崎潤一郎の歌碑除幕式・記念パーティーのあと、谷崎松子夫人、嶋川信子さん、市居嘉雄さんのお三方に〝大谷崎〟の住吉時代について話し合っていただいた。松子夫人と信子さんは、『細雪』四姉妹の二女幸子と四女妙子のモデルである。

谷崎　松子さん

★〝大谷崎〟にふさわしい華やかな歌碑

――今日、除幕されました歌碑は、石の色がとてもよろしいですね。

市居　初め、私の積りとしては地元の御影石の自然石で歌碑を建てたかったんです。ところが建てることになった阿弥陀寺の門前となると、周囲が御影石の石垣でして、それでは歌碑が目立たなくなる。次に考えたのが黒御影石。しかし、どうも黒では陰気な感じなので、歌詞にふさわしく明るくて桜の色に近い石はないか、ということで石屋さんに相談したんです。その結果、インド産の赤石に決めました。

谷崎　赤い石が華やかですね。どこかに華やかさがあるというのが谷崎の好みなんです。

市居　歌詞が「ふるさとの花にこころを残しつつ立つやかすみの菟原（うばら）住吉」と花のことを詠んでいますので、ぴったりだと思ったものですから。

谷崎　歌詞と石の色がよく合ってますねえ。ぱっと見たときに、そう思いましたよ。

――歌碑をお建てになろうというきっかけはどういうことからなんですか。

市居　私がおととし、『谷崎潤一郎の阪神時代』という本を書くために、いろいろと文献を読みましたが、阪神間に二十年以上もお住まいになった文豪なのに、地元には記念碑の類いが一つも建っていないんです。それで「疎開日記」に出ております今回の歌碑の歌、これは華やかな潤一郎先生らしい歌で、この歌碑を最初は住吉駅前に建てたいと思ったわけです。潤一郎の歌碑というのは、

市居　嘉雄さん

嶋川　信子さん

すでに吉野にありますが、吉野にはお住まいになったことはないんですよ。『吉野葛』の取材に行かれたときに詠まれた歌が歌碑になってるわけですね。

谷崎　紙漉き場の見えるいい場所にございます。国栖（くず）の中学校の中にあるんですが、碑の上の方に立って下を眺めますと、吉野川の流れが見えまして景色がよろしうございます。

市居　お住まいになったことのない所にさえ碑があるのに、この阪神間に一つもないのは寂しいと痛切に感じましてね。昔、住まわれた家は、岡本や反高林（たんたかばやし）などに何軒か残っていますけれど、旧谷崎邸と分る標識など何もないんです。外国では違いますが。

谷崎　大きな都市より、地方の都市の方が出身した人を大切にしているようですね。

市居　来年の生誕百年を記念して、芦屋と本山では、松子夫人が〝細雪ゆかりの地〟と揮毫された石碑を建てようという運動が進められているようです。また甲南小学校では、小説『細雪』に昭和十三年の水害に遭う場面が出てきますので、宮崎校長はその文章の部分を校内の石に彫って記念碑としたいといわれています。

谷崎　甲南小学校にそういう文学碑があって欲しいですねえ。

市居　今日の歌碑除幕をさきがけとして、阪神間のあちこちに潤一郎先生の記念碑が建つというのは、大変うれしいことです。

今年は没後二十年、来年が生誕百年です。いいきっかけだと思いますよ。

★戦争中でも〝美味〟を追求しつづけた

――今日の記念パーティにお集まりになった皆さんを拝見しておりますと、阪神間特有の雰囲気がありましたね。

谷崎　本当に、それはものすごく感じましたね。何か普通の会合よりも〝温ったかさ〟に包まれるような感じが強うございましたねえ。

市居　嶋川さんのお知り合いも何人かお見えになっていましたが。

嶋川　私は戦後しばらく阿弥陀寺から一丁（約百

米）ほど上に住んでいたんです。昔からこの界隈にずーっと住んでおられる知り合いの方もいらっしゃってました。

市居　嶋川さんは昭和十九年の四月十五日は、住吉駅に見送りに行かれたんでしたか。

嶋川　昔のことではっきり覚えてませんが、見送りに行ってすぐ帰ったのでしたかなあ。

市居　『細雪』の一節に〝こいさん〟が習いに行ったという「野寄の洋裁学校」が出て来ますが、当時、白鶴美術館の下に田中千代洋裁学校があって、嶋川さんはそこへ通っておられたんですね。

――当時としては、嶋川さんはモダンガールだったんですねぇ。

嶋川　当時ちょっと先へ行っていたんですよ。

市居　『細雪』の物語は、反高林の家での日常生活が殆んど下敷きになってるんですね。

谷崎　創作ノートはみなあの家で書かれたものばかりです。阪神間に住みませんでしたら『細雪』は出来なかったかも知れません。

嶋川　あの家がなかったらモデルになった私ら姉妹三人が一緒に寄られへんかったでしょうね(笑)

★阪神間には尽きない思い出が

――住吉で一番思い出に残っていられるのは…。

谷崎　谷崎が住んだのは住吉が一番長くて八年いました。思い出しますのは大戦中のちょうど防空演習が始まりました頃のことですが、谷崎が「バケツを持って走って何になる」と言ってましてね。もともと進歩的な考えを持っていた人でした。

私がモンペをはいて、町内会のみなさんと馳け回ったりすることが、自分の考えとあまりに違いすぎて、自分でもムシャクシャしたんでしょうか、私が頑張っていますのに、手を引っ張ってトットッと連れて帰るんです。今だから言える話ですが当時は非国民扱いにされかねませんので恐かったですよ。

市居　熱海から津山へ疎開される途中、魚崎の家へ寄られたときに空襲に遭われるわけですね。昭和二十年の五月中旬ですが。

嶋川　わざわざ空襲に会いに行ったようなものでしたね（笑）。

市居　『疎開日記』を読みますと、潤一郎先生は、食べるものが少ない戦争中にもかかわらず、おいしいものを食べようと努められたことには感心しますね。

谷崎　贅沢なものではなくても、おいしく食べるということに熱心でした。パンの焼き方を習いに行きまして、イーストを手に入れて家でパンを焼いたりしました。

嶋川　どぶろくをつくって、その麹でパンを焼いたこともありましたね（笑）。

谷崎　どんなものでもおいしく食べるってことにずい分と執着していました。イーストが手に入らないときには、ジャガイモを蒸して徹夜で発酵させて、それでパンを焼いたりしたこともございました(笑)

市居　潤一郎先生はいろんなおいしいものを食べに行かれたようですね。

谷崎　『細雪』に出てきます与兵衛とかハイウェイには一緒にまいりました。

市居　食通の潤一郎先生にとって、関西の海の幸、山の幸は、大きな魅力だったでしょうね。

『細雪』には食べる話がよく出てきすので、そういう意味でも読むのが楽しみですよ。

谷崎　今日、こちらへまいりまして、言葉にならないくらいにとても思い出すことが多いんです。頭がいっぱいになるぐらいに……。『細雪』についても尽きないくらいの思い出がございます。

私が常日頃考えていましたことで、今まで話す機会がなかったことがございますのは、トアロードのことを書いた初期の作品に『赤い屋根』（昭和六年）がありますが、この中で、関西は、いわゆる白砂青松。関東に比べて明るく、赤い屋根が一番似合うのが阪神間だと書いております。こういうことを言い出したのは谷崎が初めてではないかと思いますねぇ。神戸の魅力を早くから知っていたんですね。単に阪神間が好きだったというのだけではなく、文化的な雰囲気といいますか、独自な一つの世界があるというところに魅力を感じていたんでしょう。

8月1日から27日まで、国立文楽劇場（大阪）で谷崎潤一郎生誕100年記念として「細雪」が公演される。四人姉妹には淡島千景、新珠三千代、遠くらら、桜田淳子が扮し絢爛さを競う。

市居　当時とは阪神間もずい分と変りましたが、今、潤一郎先生がおられたらどう思われるか、興味のあるところですね。

谷崎　そりゃ、本当に面白いと思いますよ。ずい分と好きなことが新たに出来ていると思います。現代の女性の服装とか趣味だとかに興味を持ったと思います。感覚としては当時からモダンでしたから。今頃になって、見方が細かく鋭かったことがとってもよく分かります。そこへ私がたどり着くのにずい分と年月がかかったように感じますね。

――奥さまが谷崎先生に一番ひかれたところと申しますと……。

谷崎　そうですねぇ、ひかれたところ……すべてですねぇ（笑）。

――わあ！　熱が出そう……（爆笑）

谷崎　今になって谷崎の大きさが分ります。今にして知る大きさというか、豊かさというか、そういったすべてが分り出したのは、つい二、三年前からかも分りませんねぇ。やはり齢をとらないとダメですね。若くては分らないこともありますよ、まことの愛とか何とかいってもね……。当時は、やっぱり随いていけなかったところもありましたし、今になってその深淵さが分ってきたということではないでしょうか。本当に物事を知るということは、なかなか歳月がかかるものでございますね。

（オリエンタルホテルにて）

新しい神戸の風景・冬春合併
写真コンテスト 作品募集

主催／月刊神戸っ子
協賛／㈱兵庫フジカラー・富士写真フィルム㈱

応募要項

題材　月刊神戸っ子は、年4回、四季折々の神戸の風景に題材をとった写真コンテストを主催しています。今回は、〈神戸の冬・春〉をテーマに冬と春を感じさせる神戸の風景、生活などを、あらゆる角度からねらった新作を募集します。

サイズ　白黒、カラープリントは四ツ切、組は5枚以内、カラースライドは35㎜版以上

募集締切　昭和60年6月30日（当日消印有効）

受付場所　月刊神戸っ子編集室（郵送、又は持参のこと）

審査　堀内初太郎先生、緒方しげを先生
小山　保先生、小泉康夫

発表　締切り日の翌月、応募者に直接通知いたします。

おわび　都合により、冬と春を合併させることになりました。応募者の皆様には御了承頂くようお願い申し上げます。

賞

- ●推薦　1名　賞金5万円（月刊神戸っ子賞）
  副賞（富士写真フィルム賞）
- ●特選　3名　賞金2万円（月刊神戸っ子賞）
  副賞（富士写真フィルム賞）
- ●入選　10名　賞金5千円（月刊神戸っ子賞）
- ●佳作　30名　賞品（兵庫フジカラー賞）
- ●特別　1名　賞品（フジカラーHR1600賞）

細　則

- ●応募作品は未発表のもの、または他に発表予定のないものに限ります。
- ●入賞作品の著作権は主催者に属します。
- ●モデル撮影の場合は、本人の同意を受けて下さい。
- ●入賞作品のネガは通知があり次第主催者に送っていただきます。
- ●応募作品は返却いたしません。

左図のような見本の応募票を作品の裏に貼付けてください

新しい神戸の風景写真コンテスト		
題名		
住所		
氏名	男・女	歳
カメラ	レンズ	
絞り	シャッター	
フィルム	印画紙	
撮影年月日	撮影場所	
取扱材料店名		

●お問い合わせ●月刊神戸っ子／〒650 神戸市中央区東町113-1　大神ビル99F　☎078-331-2246

LÖWENBRÄU

いま、バイエルンブルー。

左から
レーベンブロイ缶350mℓ
レーベンブロイ缶500mℓ
レーベンブロイびん350mℓ

※くお願いうびんのお取扱いはやさしく、日なたや倒れやすいところには置かないでください。

ドイツが生んだ世界のビール 生

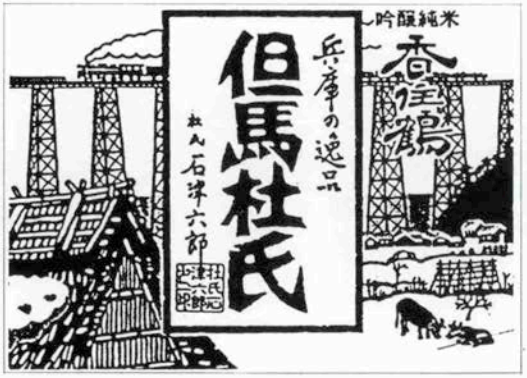
レーベンブロイ

アサヒビール株式会社

129

杜氏とは、酒を造る職人の頭ですが、酒造りの職人を総称して杜氏と呼ぶこともあります。杜氏の出身地、兵庫県丹波地方は、日本最大の杜氏出身地で、江戸時代宝暦年間における記録が残されているほど。その丹波出身の杜氏の手によって銘酒・小鼓は醸造されています。

兵庫県氷上郡市島町中竹田 合名会社　西山酒造場 ☎07958(6)0331



但馬は、兵庫県北部地方に位置し、冬季は山里で2メートルの積雪をみることもまれではありません。現在約2000人の季節酒造工が全国の酒造場で日本酒の生産に励んでいます。香住鶴の石津六郎翁は但馬杜氏の優秀な技術と伝統を受け継ぎ、労働大臣賞を受賞した名杜氏です。

兵庫県城崎郡香住町森 香住酒造有限会社　☎07963(6)0029

□竹中郁先生没後三周年に寄せて

「友情の作品展」前後

足立　巻一〈詩人〉

竹中郁さんが亡くなられて早くも三年が過ぎる没後、その著作を毎年の忌日に発行することにし、一周忌の昭和五十八年にはまず『竹中郁全詩集』（角川書店）を出した。一冊八千五百円という高値だったが売り切れ、古書店でも入手できにくくなった。昨年には『少年詩集・子ども闘牛士』（理論社）を刊行したが、これはことしの日本児童文学者協会特別賞を受けた。こうして竹中さんの再評価は急に高くなっている。

そして本年には文学・美術についてのエッセイ集『消えゆく幻灯』（編集工房ノア）と主に神戸についての文と絵『私のびっくり箱』（神戸新聞出版センター＝本誌に連載された「私のひろいもの」も収録）を公刊した。これからは児童詩論集『もしも地球に子どもがいなかったら』、『こども詩の会詩集』、味のエッセイ集『わが舌、わが町』や翻訳集、校歌・社歌集などを出さねばならぬ。出版不況の折柄出版社に頼れず、自費出版も考えねばならぬ。編集にも金がかかる。わたしは窮した。

そのあげく、竹中さんと親しかった画家・詩人に作品を寄付していただいて売り立てることを考えた。ちょうど梅田近代美術館で中村貞夫個展が開かれ、小磯良平、伊藤継郎、石阪春生、中村貞夫の四画伯がオープニングで集まられたので相談してみた。すると大いに応援するといってくださった。また、梅田画廊の土井賢治会長、野呂好徳社長も無償で展示事務を引き受けられた。

ここでわたしは実行を決心して出品をお願いした。前記四画伯に須田剋太、津高和一、中西勝、新宮晋、富士正晴、杉山平一を加えた十氏である。お願いの口上を「まことに嫌なお願いで、最初で最後のおねだりです。お察しください」と結んだ。この言葉に偽りはない。また、「旧作で結構です」と書いた。

ところが、小磯さんをはじめ画家はみんな力のこもった新作を描き、富士さんは竹中さんの詩「誕生日」を長大な和紙に書き、杉山さんは三、四枚で結構ですといったのに十一枚も詩画を寄せてくださった。

こうして「竹中郁さん没後三周年記念・友情の作品展」が四月一日から六日まで大阪梅田画廊本店で開かれた。初日にかけつけて、わたしは感涙をおぼえた。おつきあいで出したという作品は一点もない。敬愛する画家・詩人が誠意を傾けた作品がならんでいる。それぞれに強い個性を主張しながら竹中さんへの友愛で結ばれている。これほど充実した作品展は近年なかったと自負すること

ができた。そのかわり、もうこういう展覧会を二度と催すことはできないと観念した。四月三日の午前八時十分から毎日テレビ「モーニングナウ」でわずか一分半、「友情の作品展」のことを紹介しただけなのに、そのあとは梅田画廊に問い合わせの電話がかかりづめであった。

打ちあげの六日には会場を梅田近代美術館に移し、竹中さんをしのぶとともに散文集二冊の出版を披露するパーティを催した。作品の頒布はチャリティ方式にしていたが、その席上で入札を締め切って結果を報告した。三十二点の作品全部が落札され、売り上げ総額は四百三十一万円で、市価よりはかなり安い。

わたしは報告の結びとして言った。

「意外に安い値で落札された方もあると思いますが、それは竹中さんからの贈り物と考えて友情の作品をどうぞ大切にしてください」

梅田近代美術館でのパーティ（右上は作品群）

十人の画家・詩人は竹中さんと親しかっただけでなく、わたしが年来尊敬する方たちばかりである。そのご厚意にどう謝意を表したらいいのか。その作品を買ってくださった方々、パーティに出席いただいたたくさんの人たちにもどのように感謝したらいいのか。それらのご厚意には必ず何らかの形で報いたいと、散会ののちわたしは自分に誓った。そのかわり出欠の返事もくれなかった人とは絶交することにした。

こうして竹中郁著作出版の見込みが立ち、児童詩論集編集の仕事にかかった。これには大阪市立こども文化センターでの「こども詩の会」で竹中さんの教えを受けた中本幸美さんが手助けをしてくださる。中本さんは二児の母でもある大阪の小学校教師であるが、昨年大阪市教育委員会の推薦で兵庫教育大学の大学院にはいり、いま修士論文「竹中郁論」に取り組んでいる。児童詩誌「きりん」全冊をはじめ竹中著作のすべてを教育大学の寄宿舎に持ちこんで三部コピーしている。一部は中本さんの論文資料となり、一部がわたしに届けられて児童評論集の原稿となる。

五月、思いもかけずわたしは第39回神戸新聞平和賞を受けた。もっと適当な人もいられるはずと思ってためらったが、授賞理由の第一が竹中郁著作の編集刊行にあると聞き、また竹中さんは受賞が内定した直後に亡くなられたという事情を知らされ、竹中さんの代わりに、あるいは竹中さんとふたりでというつもりでありがたく頂戴することにした。

こうなってはいよいよ、竹中さんの著作刊行と評伝の執筆とに余命を尽さなければならなくなった。寿命がほしいとこのごろつくづく思う。

夢エッセイ〈Ⅳ〉

大正の夢・昭和の夢

野口武彦〈神戸大学文学部助教授〉

カット／田中一好

大正十五年（一九二六）十二月五日といえば、あと二十日の後には昭和と改元することになる大正という時代のどんづまりである。いや、事実としてはその三年前の大正十二年九月一日、あの関東大震災を境にして、すでに動乱の昭和期は始まっていたのかもしれない。永井荷風の日記『断腸亭日乗』は、こうした過渡期の世相を克明に記録しているのだが、さてその十二月五日の日記で面白いのは、荷風が明け方に見たという「一場の奇夢」を書き誌していることである。『断腸亭日乗』はいまのところ荷風全集でしか読めないから、それをそっくり紹介しておこう。

余独り郊外を散歩せしに風雅なる茶室風の家ありて、蔦の紅葉したる柴門に貸家札張りたるを見、何心なく門を入り玄関ともおぼしき戸口に到るに、竹の聯を柱にかけたり。聯句は何といひしにや覚めて後思返すこと能はざれど、いづこにてか一度見たる事ありし文字なるに不思議のこともあるものと、少時佇立みゐたるに、忽家の中に女の声して、入口の障子明けてこなたへと案内するものあり。元より知る人ならず。されど其の顔立身体つきより言葉づかひまで、日頃かくの如き女もあらばと思ひゐたりしたぐひの者なり。一見旧知の如き心地して導かるゝまゝ家の内に入らむとして夢はさめたり。

さすがに荷風自身も「をかしさのあまり之をしるす」と書いているのだが、読者の立場からいうと、まさかあの荷風がと言いたくなるほど、これは純情可憐な夢である。荷風ファンならよく御存知だろうが、この時期四十代後半にさしかかった荷風の性生活はかなり荒廃していた。大正十年代、荷風が囲い者にしてはすぐに別れた女は何人もいる。だからこそこの甘美な夢は、意外な感を与える。というより、そんな女体渉猟の心理の底にある意外な抒情性をふと垣間見せられる思いがするのである。

ところで、右の夢の記録がもっと興味深いのはそれが何あろう鶴屋南北の有名な怪談劇、『東海道四谷怪談』の一場面にたいへんよく似ているからである。大切「蛇山庵室の場」の幕明きでは、まず「心」という文字が上に引き上げられる。これからは夢の場面であることを示す約束事である。舞台は萩の花が盛りの秋の野。中央に百姓家があり、すだれが巻き上がると、美しい在所娘が糸車をあやつっている。そこへ主人公の民谷伊右衛門が登場。現実——といっても芝居の中のそれだが

――にはお岩の亡霊に苦しめられ、あがきぬいている伊右衛門だが、この夢の中では念願どおり仕官が叶い、浪々の身を脱出してりっぱな武士になっている。そして伊右衛門は、この所在娘の顔立ちに、昔まだ愛しており、まだ美しかった頃の若妻お岩の面影を思い出すのである。いうまでもなく、舞台はやがて急転。娘の顔はあの怖ろしい亡霊の形相に変る。岩「うらめしいぞへ、伊右衛門どの」伊「ヤ」。と飛びのくはずみに、あたりに陰火が燃えさかり、伊右衛門は、「ア、、夢か。はてさて怖ろしい。まだ死なぬさき、この世からの火の車」という生き地獄のうちに眼をさまさなければならない。

これはどこまでも想像にすぎないのだが、荷風のさきの「一場の奇夢」は、『四谷怪談』のこの夢の場面が当人の意識せぬところで影響しているのではないだろうか。毒を飲まされて面相が醜く変り果てたお岩をむざんに見捨て、新しい妻を迎えたばかりに死霊に祟られる伊右衛門の心の底にもまた、やはり意外に抒情的な女性への思いがあり、それが荷風の不毛な漁色の深層にひそむ琴線にふれたということが、ひょっとしたらあったのではあるまいか。まんざら証拠がないわけではない。『断腸亭日乗』を読み戻してみると、前年の大正十四年（一九二五）五月十九日に、「松莚子の邸に会合し、東海道四谷怪談正本の読合せをなす」という記載がちゃんとあるのである。ちなみに、松莚とは昭和十五年まで在世した二世市川左団次のこと。

深層心理での真相はともかく、問題の夢の記録の日付に前後して、荷風の日記には銀座のカフェ『タイガー』の女給をしていたお久なる女性の名前がよく出て来る。以前の男関係を知っても、荷風はぞっこん惚れていたらしい。ところが翌昭和二年十月のこと、荷風散人ついに「女給お久また来りて是非とも金五百円入用なりと居ずはりて去らず」と日記に書くような目に遭うのである。「宛然切られお富の如し」というのが荷風の感想であった。大正の芸者から昭和の女給へと性風俗は移り変る。その夢のはてに荷風が見届けたのは、この「実に恐る可き毒婦」であった。切られお富とお岩様はもちろん違うけれども、面相変る悪女のありさま。あの十二月五日の夢をもう少し見続けていたら、やはりあれは正夢だったとうなずけたかもしれない。

●こうべ味な旅 ⑫

神戸の味は港が匂い

白石かずこ〈詩人〉・絵／石阪　春生

神戸といったら神戸牛、だがわたしの一番最初に思い出すのは港である。

あの桟橋にたち、ポーズをとって写真の撮影に応じたことがある。向う側を外国船の水兵が歩いていた。眼と眼がカモメ同志のようにあって、心の中に白い雲が飛んだ。だが今は、そんな風につかのまの恋や遊びをするわけにいかない。わたしは別な用事でこの街にきているのだから。そういって自分の心をなだめた。

横浜の港でもそうだが、わたしは港町にくると必らず桟橋にいってみたくなり、晴れた日はそこにたたずみ、外国船の長旅とみえる船体のサビなどを船員がゴシゴシとっているのをボーッとみているのだ。こういう時、長い間、海の上で潮にやけた彼らの顔や肌がなんとセクシーにみえることだろう。

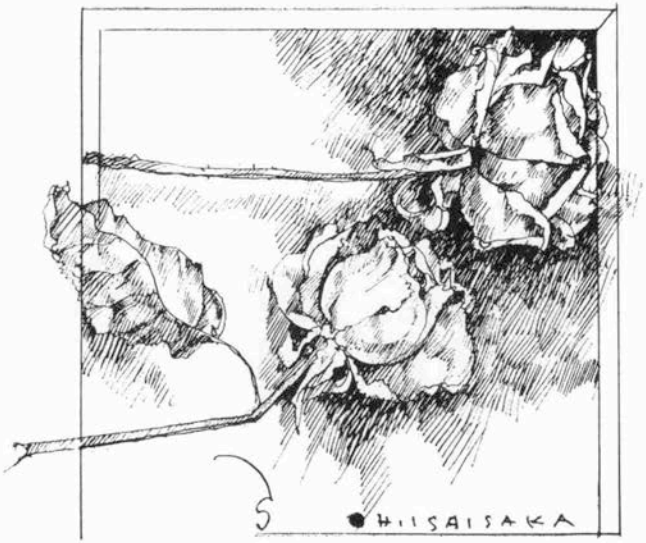
こんな人とデイトしたいとすぐ思ってしまうのだ、その次に、でも背広など普通の服に着かえて街にまぎれ、都会に入ってしまったら、きっと魅力がなくなるにちがいない。ああ、海の男は海の傍か船でみるのが一番粋でスバラシイなどと、はやばやと結論を出してしまうのだ。特ににの神戸の街にはわたしの愛するYちゃんがいる。いたというべきだ。今はお嫁にいき、いなくなってしまったからだ。彼女はオーティスの「ドッグ・オブ・ザ・ベイ」の唄をこよなく愛し、ある日トランペットを吹く男がこの神戸の港に現れてそれを吹いてくれるのが夢よ、といい、とうとうその男が現れて吹いてもらったあと、息せききって電話がかかってきた。神戸から東京への長距離電話である。今どき、こんなに純でロマンチックな女の子がいるかと思うほど彼女は表面快活でアクティブでやんちゃな男の子のようにふるまったが、内側では常に夢みていた。彼女とそのお友だちのテッちゃん、服部くんたちとよくディスコに踊りにいった。今、思い出しても泣きたいほどなつかしい。水たきの美味しい店のお嬢さんもいて、彼女のお店でも心暖くもてなしていただいた。

ただ残念なことにわたしは店の名をどうしても想い出せない。昔の恋人の名すら、その時近くにいた友人が娘にきかなきゃわからない位なのだから。

だが神戸は美味しく、しゃれた店があり、外国をうろついてる錯角に時折、おちいった。アーケ

イドのところをずっと歩いて、靴屋さんをみて歩いたこともある。横浜的オシャレな感覚があるが横浜ともちがう。その隣りが東京でないので、ホントに旅して、離れてきたという感じがある。

あの山あいにもギリシャの神殿をさまよう風な透明感のある美しい詩をかく友人が住んでいる。ハドリアヌス帝を訳した多田智満子だ。ドッグ・オブ・ザ・ベイのユキちゃん、テッチャン、神戸でヤマハの黒いバイクにまたがり、詩の金粉ショーもやった。もっともやったのは神戸組だけど。



わたしはニューオルリンズで買ったストリッパー用のピンクのサテンのブラとニューオルリンズ・ジャズとかいたやはりピンクのサテンのGストリングに黒の熊のファーコートで詩をよんだ。

わたしと神戸っ子グループは熱い遊びの友情でつながっていて、ディスコでどのようにセクシーに踊るかに情熱をかたむけていた。

いいかえればわたしは神戸の、頭のいい、ことのほかヒップな粋ないい奴、いい子と友だちだったのだ。その子たちの青春とつきあっていたのだ。

それがわたしにとっての神戸の味だ。

なつかしくて美味しい、恋を恋する味だ。

特に食べ歩きしたわけでもないが、しゃれたパン屋やケーキの店があり、そこに入ってもう旅人になりきった。そこを神戸のヨーロッパのどこかだと思った。

もう一度、かえっていきたい街だ。

だがわたしはあの棧橋にたち、もう誰もいないことに気づくだろう、昔、一緒にあそんだ仲間はそれぞれおちつき、卒業し、会社につとめたり、遠くにお嫁にいってしまったのだから。

わたしは百年前の恋人を探すようにみおぼえのある店をのぞき、そして買物などしながら、ステーキなどをコショーのかわりに涙などふりかけて食べるにちがいない。

〈著者紹介〉

カナダ生れ。早大卒。魚座。詩集「砂族」（歴程賞）「一艘のカヌー、未来へ戻る」（無限賞）「聖なる淫者の季節」（H氏賞）や最近作は詩集「火の眼をした男」（集英社）「燃えるような恋をしたい、あなたに」（大和文庫）など。ジャズや舞踏と一緒に詩の朗読のパフォーマンスで毎年世界の詩祭に招かれ、活躍の国際詩人。

●エッセイ
私と神戸

第2の青春時代

小森　和子〈映画評論家〉

75歳の……まもなく満76歳の今、私はおそらく生涯で最高にしあわせ、を感じている。といっても、もちろん私はお金持じゃない。ただ自分で働けなくなった時も2、3年ぐらいは暮せる貯金はしておきたいと用意ちゅうだ。これは58歳の時、思いがけぬ大病で入院手術し、やっとまた独り暮しができるまでに快復した時、お世話になった人たちから、笑い話ながら「おばちゃまの救済金を募らずにすんでよかった。ギリギリまに合ってめでたく退院して」と、私の預金帖を預けた人たちにいわれた時、こんなに親切にしてくれた人たちにオ金の心配までかけたんだナ……独りだから、何かの折りには他人の世話に、親切にすがる。その人たちにオ金の心配までさせたなんて……これからは働ける間に貯金もして、他人の親切の上にオ金の心配までは決してかけじ、と決意したわけ。

それには、私の性格はとても便利にできてるようだ。というのも、私は少女の頃、お正月に他の子が晴れ着をきてるのに、私は毎年四ツちがいの姉のオフルばかり、と祖母の膝で歎いていた時、いきなり入ってきた母が、祖母から事情をきくと「和子、他人を羨ましがったり、まねしたいと思うのは弱虫のショーコですよ。お母様はそんな弱虫を生んだおぼえはありません」というなり、スックと立って出ていった（この事は私の自伝〝流れるままに、愛〟集英社版にくわしく書いたが）その時以来、この言葉は肝に銘じたみたい。

でも自分なりにおしゃれやぜいたくを謳歌したのは、22歳から32歳まで、戦争直前までの神戸時代。自分では〝第2の青春時代〟と思ってる、この神戸での10年間だ。幼い頃から念願の家出をして、正真正銘自立した時代。

念願の外国商社……父が小さな貿易商で幼い頃から外人を見なれたこともあったらしいが、タイピストから秘書に昇格した頃は、神戸でも高級地と、当時はされていた北野町の支社長宅にも出入りし、支社長夫人の買物や美容院ゆきの案内もしたことから、パーティなどの手伝いもさせられ、10年間に3代かわった支社長夫人とも特に親しくされたみたい。

舶来化粧品を顔、首のみならず全身につかうことをおぼえたり、中国人の下着専門店で頭文字を縫いとりさせて下着にもこってみたり、ファーコートや好きな宝石類も身につけて、元町やトアロードを独り歩きするのが、とても好きだった。そしてなだらかな坂道のトアロードの正面に、赤いト

アホテルを眺めると、なぜかホッとして心楽しかった。そしてユーハイムやドンバルでひとりコーヒーをのむのが、友人知人とさんざめきながら飲食する楽しさとは、またちがったムードだった。特に私はその頃から映画はひとりで見るのが好きだった。思うままひたれるからだ。

後年、シャーリー・マクレーンが「独りで楽しめるすべを知っている人間ほど強い」といったけど、それは今も実感している。また、これも後年、オードリー・ヘプバーンが「最良の美容法は、心にできるだけいいことを感じることね。そうした内面は必ず表に現れるものだから」といったのも実行ちゅうだ。

そして私は神戸に行く度に、特に感謝したい気持になる。だって私が今の職業に入り、シャーリーやオードリーのような、女性としても素晴らしいスターを知るようになれたのも、神戸時代がモトのような気がする。

またこの6月5日には民音の仕事だけど、神戸にいける。と思うと、心うずくまでに楽しい。うずくまでに、なんてヘンだけど、オ金やモノには恵まれてたと自分なりに思うけど、ラブ面では苦しきことの多かりし神戸時代だからか。でも過去は過去。

今は見ちがえるばかり繁華街になった元町やトアロード……でも私は元町の凪月堂の一隅にいこう時、なぜか心なごむ。ここのご主人が国際的センスもあるなごやかな人柄で、部屋の調度までもおちつかせるムードだからか。そして私に、はるか戦前の、楽しきことも多かった〝第2の青春時代〟をそぞろに想い起こさせてくれるから、だろうか。

オードリーと着物姿のおばちゃま

空間リサイクルで芸術を街なかへ

―芸術センターの設立を目指して…

□出席者□（順不同・敬称略）

増田　洋〈兵庫県立近代美術館学芸課長〉
小林陸一郎〈環境造形Q・造形作家〉
今井　祝雄〈造形作家〉
大森　一樹〈映画監督〉
木下佳通代〈平面作家〉
小林　郁雄〈UR神戸事務所・建築家〉

―最近の表現・文化活動の流れは、この街でどんな形で表出しているんでしょうか。欠落した部分というのもやはりあるのではないかと思われますが、お集まりの皆さんの日常の印象から説き起こしていただいて、併わせて、人材と情報の集約の場（芸術センター）の構想についても言及していただきたいと思っております。

★表現者の閉塞状況は神戸の街にも見え隠れする

増田　最近は怠けているのかも知れませんが、あまり注目すべき動きに気付かなくなっている。いくつかあることはあるんですが、落ち着いて来たというか、手際が良くなったと言うのか、巨視的にみれば、70年代に噴出したものが熟成されている時期という気がしています。

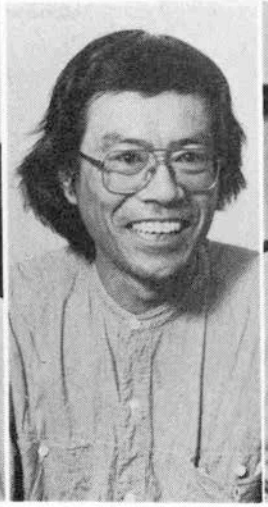
増田　洋さん

大森　映画というものについてお話ししますとね、これはお金がかかるものなんです。例えばペイ・ラインに乗せようとすると、200万人動員しなくちゃいけない。映画界で動員も一定の評価の対象になるのはそういった所にもあるんです。それから、公開中の映画がビデオで販売されてしまう。そのうち東京や大阪なんか大都市を別にしたら、地方に映画館が残らなくなるんでは…と思ったりもしています。新開地なんかに、たまに行ってみると、客も少ないし…。

小林陸　僕は環境セッティングの問題も大きいんやないかと思いますね。映画自体が面白くなっても、集まる対象が決まっていて、みんな集まってシラけて座ってる。僕は映画は面白いと思っていまして、大きな映画館で見てると、とにかく迫力があって…大勢で観れば恐くないって感じがね。（笑）〝箱〟について言うと、野外の上映

今井　祝雄さん

木下　佳通代さん


小林　陸一郎さん

小林　郁雄さん

大森　一樹さん

が見直されるんやないかと…ドライブイン・シアターとかいう形で。

小林郁　都市論と言うか、そういった面からは、少なくとも都心の大きなスペースが、文化・レジャー機能を重視し始めていますよね。三越劇場や西武グループが先鞭をつけている。僕は、元町にそんなスペースが出来ないかと話しはしているんですが。ハーバーランドでも「芸術創造センター」というものを考えています。

増田　映画とか音楽とか美術とか、どれを取ってもそうだと思うんですが、それを見せる場所の方がとり残されていく印象があります。少し固い話になりますが、日博協が毎年、その1年間の利用者合計を出してますが、その種別を出すと美術系が目立って少ない。もちろん、立地条件などもありますが…、美術人口と言うか、作品を制作している人達は確実に増え続けているのに、その一方でそういった実情もあります。きょうのテーマにもなっている〝センター〟設立にはこんなことも考え方の底流にありますね。

今井　東京とこっちを比べると層の厚さの違いを感じます。海外の動きを見ると更にそれがあるんです。例えばナイヤガラには、新しい美術館形態として、「アート・パーク」って言うものがあります。夏の3カ月間しか開けていなくて、アーティストを呼び寄せてそこに住んでもらうんです。だから訪れた客も一緒になって、生きたナマの現場をそこに創ってしまうわけです。もちろん制作風景も見ることができるんですよ。

木下　そうね、とにかく作家を育てる設備が極端に少ないっていうのが、日頃いちばん感じていることです。何とかセンターって、いくら沢山出来ても、本当の作家が育たないと、なんにもならないでしょ。えせ文化じゃないものを創り出そうとするのなら、〝センター〟って言う社会的つながりを、そんな方向へもっていって欲しいと思いますね。ベルリンへ行った時にも強い印象があったのは、ある程度政治的にアトリエを提供していたりす

るんです。日本ではまだとても無理な話かもしれませんけど…、かといって作家たちが何人集まったところでどうしようもないんです。

小林陸　昔はパトロンがいて、そこら辺の費用のかかるところをフォローしてたね。今は、その役割が行政へ移ってるわけやけども、まだ慣れてない。地方都市でも札幌やなんかは、街の中に総合情報センターとしての機能を作ってんねんやから…。神戸も…まあ、じれったいところもあるけども、いいものを置いていこうという姿勢があるし、成功もしてるんやから、作家の方からも自己主張をせないかんと思います。それから平行して意識開発を続けていかないとね。

日本は、フランスなんかと比べて画商の発達が遅れた国ですから、画廊っていうのも、観に行くところではあっても、作品を買い入れるところまではいってなくて、それもしんどい部分ではあるけども。

大森　映画の話になりますけど、半額デーっていうのがあるでしょ。あれにぶわーっと行くでしょう、で、通常の値段になると誰も行かないのね。たまたまそんな日に映画館に行くと、前にいる人が「次の半額デーはいつですか」って聞いてたりする(笑)。あーいうのを見ると何を考えてるんかなぁと思いますよ。そんなものじゃないでしょう？これだったらいくらお金を出してもいいっていう価値観がないでしょう、日本では。情けないことなんですけども、どうやったら元が取れるか、こればっかり考えてますね(笑)。ビデオに人が集まるっていうのも、日本人てのは、家を中心にした、リビング感覚が強くて、だからテレビ、ビデオに走っていく。そのうち、美術館もビデオにとってかわられる時代が来るような気さえしてるんです。

小林陸　ものを作る側が良いものを残すことやね。人間は感性の動物やから、良いものを置いていけば、本物に対する触感が働くようになる。作家の方も、なんぼの予算やからこれだけしか作れませんじゃあね、エネルギーが足らん。須磨離宮でもね、1回展・2回展くらいの頃は、関根伸夫さんの「穴ぼこ」とかね、多田美波さんのけったいなUFOみたいなのとか…実験があった。ところがね、野外だから、対光性だとか危険性だとか、保存する側での制約が出るようになって、オーソドックスなスタイルしかできなくなってる。〝センター〟っていうのも、1回限りの作品を見せるようなものを作ったら、有機的に動くんやないかと思うんです。

増田　そういった素地は、神戸にありますね。以前、六甲アイランドの造成地に〝窓〟を造ろうって動きがあった時、最初は大阪・南港へ話しを持ちかけたそうなんですが、どうしても最後のところで（話しが）かみ合わない。ところがね、神戸では市役所の係のレベルでやれちゃったっていうね、作家のエネルギーを感じて動く社会的な基盤ができかけてますね。〝センター〟も、具体的に出していけば実現しそうな気がします。

★小学校・倉庫の空間リサイクルを

増田　いまね、神戸の街なかの小学校が過疎になって、統廃合しようとしてるでしょ、神戸小学校とか。ああいった建物をそういう方向で使えないか、と思ってるんです。これには「使わせろ！」っていう（笑）…声が上がることが必要なんですけども…。

今井　植松奎二さんが報告をしてきましたけども、アメリカに、「P・S・ONE」ていってパブリック・スクールの建物の半分を発表スペースにして、あと半分をアーティスト達に貸してるところがありますね。借りたいって言う人がひきも切らないそうです。古い建物だから、後で補修することを前提に、床に穴を空けてしまっても構わない。そのままで永久個展になってるところもある。こんな風に、新たに建てるよりも、空間のリサイクルをやると面白いですね。

小林陸　そうやね、そんな制約の無いスペースが必要やね。日本と云う国は、法律的な規制が厳しいし、行政と

市民の間で作られたルールみたいなのが、縛ってしまう。何とか審査ってのが多くて…。

木下　いつもそういうところで止まっちゃうのね。

大森　日本人は芸術が嫌いなんですよ。(笑)

今井　僕は、アート・センターっていうか、そういうものは、単に情報があるだけじゃなくって、つまり、見せるだけに終わらずに、以前、「美術劇場」って言うのがありましたが、何かを行なって帰ってもらうようなものであったらと思うんですけどもね。

小林郁　そういう芸術センターをね、ハーバーランドに提案してるんですけどね。神戸では、文化ホールから楠公さんを抜けて神戸駅に至るゾーンを〝文化軸〟と言ってるんですよ。最大のネックは、誰が金出すねんてことですね。(笑)

小林陸　コーディネーターの不在も問題としてあるね。

木下　作家が力を割いてっていうのじゃ、到底、力足らずなんですね。それ専門にやって下さる方がいないと…。

小林陸　美術館の方も完全に独立・孤絶したコアとして、設計家も意識し、作ってきたからマイナー性がある。もっとオープンな考え方でやらないとね。

増田　向こうでも長い間、大英博物館の発想から離れていなかった。その固定した枠組をとっぱらうような意味合いが、例えば、「ポンピドー・センター」なんかにあるわけですが、長い積み上げの末、あれが出来たわけで、日本ではまだまだの印象ですね。自然博物館でも、「発見の宮殿」と言うのがあって、「水の展示室」なんてのがある。そのど真ん中では実験をやっているわけです。H2Oであることを見せてるんです。博物館にやってきた人もそれをやってみることができたり、判らないという苦情の出た展示は検討したり…。そこら辺で得たノウハウを他の文化装置に持っていったりもしていますね。これはもう文化の違いというか…。オーソリティがないですね。逆説的には、オーソリティがないから…という部分もありますが。

今井　話しは変わりますが、市とか県が観光映画とか記録映画を作ってますけど、あれもね、大森さんとか、ちゃんとした監督に作ってもらったらどうですかね。「ポンピドー・センター」の紹介を撮ってたのが、確かロッセリーニでしたが。

大森　そうですね。いや、僕もね、予算とかいろいろ言ってもらったらね、割とちゃんとしたもんを作るんですよ。(笑)

小林陸　文化に対してエネルギーが向くようにしたいですね。

★一都市一文化、神戸は現代美術で

大森　映画もね、世の中、ルネッサンスの時代やないからね、スポンサーを探していくのは、作家の仕事だと思うんです。僕はね、映画も文化のひとつとするならね、これはね、乱暴な言い方をすると、「文化というものは、絶対に儲かるもんや」と言っていかないと。たまたま僕がいちばん娯楽に近いところをやってるせいかも知れませんけど、いいもん作ったら、多くの人に判ってもらえるはずやと、僕は信念持ってやってますから(笑)。儲かってこその文化ですよ。これからの時代、誰も慈善事業になんか金出しませんからね。胸張って「これや」ってね。そんでもし万が一、こけたら、「すんません」て(笑)。

小林陸　ヨーロッパにはそういうシステムがあるね。

小林郁　倉庫を使ったスペース作りというのは、どうなんでしょう。

木下　3年くらい前から、お話しを進めてもらっているんですけども。空いてるのを見たものですから。上の方へ話しが上がっていく段階で、条件的な難しさがありますね。

大森　僕がね、六甲撮影所の構想を持っているのもね、映画に限らず文化活動ってのは〝生き物〟だから…、「神戸っ子」さんの方でも、映画発祥の記念碑を建てようってことをやってはりますが、それは、まあ、死んだもので

しょう?、それよりは、生身(なまみ)のものを持ってこないと、仕方がないと思ったわけです。ロケーションをいくつかやったところでしゃあない。やっぱり映画の工場を作ろうと…。

木下 まず何かを産むためのスペースを確保して、そこからできたものが、外へ出ていって拡がっていくっていう風な方向が大事ですね。

大森 芸術活動とか文化活動っていうのは、行政が入るっていうのは、注文も出てくることで問題あるとも思うんですけどね、審査が入るっていうことは、致命的な打撃ですよね。今度、「東京国際映画祭」で、ヤングシネマフェスティバルっていうのがあって、世界各国から、いままでの自分の作品を持って来なさいと。それで、それが良かったら、制作費を出しましょうってんですけどね、この前、大島渚さんと話してて、大島さんが「あんたいい映画作ってきたからお金あげますって、それは一体誰が決めるんだ!」って怒っておられましたがね。これはやっぱり作家としてのアイデンティティーの問題なんですよ。行政には、お金の出る部分じゃなく、もっと無駄なことをやって欲しいですね。

増田 行政っていうのは、性急に結果を問いにくるんですね。公立の美術館で収集した作品が、将来的に全部残っていくっていうのは、ありえないことなんです。ある絵を買い入れたから、入場者数が増えるかっていうと、そんなこともないですよ。うちのように、現代美術展をやってるところは、それなりに腹をくくってやってるところがあります。ですから行政の人たちが気の毒というか…、防波堤にもなってくれています。

木下 現代美術の作家っていうのは、本当に地位が低いっていうか(笑)、動きたくってもどうしようもないところがあるんですよ。

増田 〝ハコ〟の問題ですけれども、空いている小学校のスペースを利用するにしても、マイナーなやり方でも、基礎固めというか、周りの人とも話し合っていかねばなりませんね。

木下 いろんな人の口から、小学校や幼稚園の話しが出ていますね。

小林郁 小学校も、放っておいたら絶対に団地になってしまいますからね。また、西神に住んでいる人達の子供さんは、こっちへ戻って来ることになるわけですから、また建てなきゃならない。その間30年くらいだけでも使えるように、早い時期に言っていかないといけない。

大森 現代美術で一本化したらどうですか。一都市一文化でいいんですよ。そうでないと、どんどん東京化していくばっかでしょう。僕もね、空地かなんかが空いて、映画館どうですかって言われたら、それは現代美術に譲りますよ(笑)。

木下 なんか同情されちゃって…(笑)

増田 いままで構想は絶えず出てきているわけですが、実現してこない。お話しとしてじゃなく、〝芸術センター〟は、具体的に手のかかるところから始めて、倉庫や小学校など、文化装置のリクルートをやる時期ですね。人材のリクルートはできてきたわけですから。

(「花銀」にて)

田崎真珠㈱
取締役社長　田　崎　俊　作
神戸市中央区港島中町６－３－２
ＴＥＬ（078）302－3321

㈱ベ　ニ　ヤ
取締役社長　松　谷　富士男
神戸市中央区三宮町１丁目10－１
ＴＥＬ（078）332－3155

㈱南インターナショナル
代表取締役　南　　泰　吉
神戸市中央区浜辺通５丁目１－14
神戸商工貿易センタービル1701
ＴＥＬ（078）232－1301

キャンペーン「国際文化都市神戸を考える」の
企画は以上３社の提供によるものです。